

「地域密着型プロアスリート」にみる 新しいアスリートキャリアの可能性

浜 田 雄 介

要 旨

競技スポーツの世界では、優れた結果を出して高い評価を得ることでアスリートのキャリア形成が安定化する。しかしそれを実際になせるのは、一部のアスリートに限られる。そこで本稿では、競技スポーツの世界における評価を絶対的な軸としない新しいアスリートキャリアの可能性を探ることを目的とした。そしてそのために、競技をすることに特化して報酬を得るのとは異質の「地域密着型プロアスリート」として活動する A 氏のキャリアについて考察した。

本稿では A 氏および A 氏の関係者に対して実施したインタビューの結果について、贈与論にもとづいた考察を行った。簡約すると、A 氏と応援者・支援者のあいだには、お互いができることをして、それによって支え合うような「応援する - される」という関係が見出された。またそのような関係では、競技の結果ではなくアスリートの存在にかけがえのない価値が伴っていることが明らかになった。本稿の事例からは、競技スポーツの世界における評価に左右されにくいアスリートのキャリア形成の実現に向けて、アスリートを競技するだけの存在に矮小化しないことの重要性が示唆された。

キーワード：アスリート、キャリア、「地域密着型プロアスリート」、価値、贈与

1 はじめに

企業スポーツの長期的な停滞、地域密着型プロスポーツやクラブチームの拡大、世界レベルで争う競技の多様化など、国内のアスリート（スポーツ選手）を取り巻く環境は大きく変化した。そのなかで顕著になってきたと考えられるのが、不安定で先の見通しが立ちにくいキャリア形成を余儀なくされるアスリートの存在である。端的に言えば、彼ら／彼女らのキャリアが不安定になる要因は、競技スポーツの世界で高い評価を得られない点に求められる。このことは、成績の低迷によって賞金を得られなかったり契約を切られたりするプロスポーツ選手を例にとるとわかりやすい。競技スポーツの世界では優れた結果を出して高い評価を得ることでアスリートのキャリア形成が安定化するのだが、それを実際になせるのは一部のアスリートに限られる。

以上のことを前提に置いて、本稿では競技スポーツの世界における評価を絶対的な軸としない新しいアスリートキャリアの可能性を探ることを目的とする。そしてそのために、競技をすることに特化して報酬を得るのとは異質の「地域密着型プロアスリート」として活動する A 氏のキャリアについて考察する。

論を進める手順として、まずスポーツ社会学および近接分野における先行研究をもとに、競技スポーツの世界における評価を軸にして形成される従来のアスリートキャリアの問題点を整理する。またそれに対して、本稿がどういった着想と観点から A 氏の事例を取り上げるのかを述べる。次に本稿が採用した調査の方法および結果を提示していく。結果では A 氏のキャリアの変遷や現在の活動内容をまとめたうえで、特に A 氏と応援者・支援者の関係性や考え方などから、いかにして「地域密着型プロアスリート」という活動形態が成り立っているのかを明らかにする。そしてこれらの結果について、贈与論における「等価なものの交換」と「贈与的ふるまい」という概念にもとづいた考察を行う。最後に、考察から得られた知見を広くアスリートキャリア一般に適応し、競技スポーツの世界における評価に偏重した現在のアスリートキャリアを見直していくための方向性を示す。

2 従来のアスリートキャリアに対する本稿の新規性

吉田によれば、アスリートキャリアとは「競技力向上を主たる目的として日常的・継続的・専門的に競技活動に取り組んでいる者」の、職歴に限らない広義の「経歴」のことを指す（吉田, 2006, pp. 210-211）。アスリートのキャリア形成には結果を出せない者を淘汰する競争原理が働いており、競技力を要因とするドロップアウト（中途離脱）は競技スポーツの世界において必然的・常態的に起こる現象である。しかしアスリート本人からすれば、ドロップアウトはこれまで歩んできた道が途絶えるという点でキャリア形成上の重大な事態に位置づけられる（吉田, 2006, pp. 215-216）。特に大学生年代以降の青年期はどのように生きるかをあらためて模索、決定していく再社会化の過程にあたり、そこでもなお競技に人生を賭ける道を選んだアスリートにとって、競技ができなくなるということは生きる意味を喪失するほどの事態を招きかねない。具体的には、自分を見失い無気力状態に陥るバーンアウトや、引退後のセカンドキャリアへの不適応といった問題に直面する可能性が考えられる（吉田, 2013, pp. 5-9）。

青年期のアスリートが競技を続けていくことの困難さは、特に競技と生活が直結するほどの高い専門性を有する場合に深刻になる。高岡はスポーツにおける「プロフェッショナル競技者」概念の外延について、アスリートとしての「専門性レベル」の高低に応じて「経済」「技術」「倫理」の各要素が連動的に変化するピラミッド構造をなしていると論じている。高額収入を得て（「経済」）、革新的なプレーを創造し（「技術」）、スポーツヒーローとしての社会的価値を体現する（「倫理」）トップアスリートを頂点とするこの構造の最下層には、一定の能力や資格があるのみの低収入または無収入で（「経済」）、既存のスポーツ構造に則してプレーし（「技術」）、勝利を目指してゲームを成立させるにとどまる（「倫理」）アスリートがいる（高岡, 2018, pp. 535-536）。要するにこの構造では、アスリートの社会的価値と経済力が実績や知名度といった競技スポーツの世界での評価によって序列的に決定されており、「専門性レベル」が総じて低かった

り「技術」や「倫理」の高さに「経済」が伴わなかったりするアスリートのキャリアは、不安定で先の見通しが立ちにくいものになってしまうのである。

プロであることにこだわるアスリートや、専門競技における受け皿のなさに苦心するアスリートのキャリアには、いつ淘汰されるかわからないなかで競技を続けるために非正規労働に従事せざるを得ないような、社会生活全般に通じる「下層性」（石原，2014, p. 90）が見出される。例えば2000年代における独立リーグの出現とともに国内で急増した「プロ野球選手」（石原，2013, 2015）は、肩書は「プロ」であっても野球をするだけでは生計を立てることができない。またこれまでの経歴や実績から考えると、将来的にもプレーによって十分な収入を得られるようになる見込みは薄い。それでも学卒後に定職に就かず、あるいは定職を辞して、アルバイトをしたり所属先を転々としたりしながら競技第一の生活を送る若者が後を絶たないという。またバブル経済崩壊以降に衰退した企業スポーツでは、学業期を終えたアスリートの就労キャリアが「就労が一切免除された企業の宣伝媒体としてのプロアスリート」と「非正規労働者やフリーターとしてのアスリート」に二極化したといわれている（水上，2009, p. 51）。短期的な成果を期待する「メダル至上主義」的価値観から前者を重要視するこの二極化によって、後者はもし企業に採用されたりスポンサーを獲得したりすることができなければ、プロを志向しながら「非正規労働者やフリーター」として何の保証もないまま競技を続けるしかない、という状況に追い込まれてしまう。

それでは、アスリートが主体的かつ持続的に自らのキャリアを形成していくには、競争に勝利して競技スポーツの世界における評価を高めるしか方法はないのだろうか。ここで別の方向性のひとつに考えられるのは、競技スポーツの世界における評価をキャリア形成の絶対的な軸にしないということである。例えばあるエリートトライアスロン選手（浜田，2023）は、競技力では上位選手におよばずアルバイトをしながら競技を続けていたが、やがて本人にとって「破格」の好条件で競技活動を支援・優先してくれる企業に採用され、「納得」のいくキャリアを送ることができていた。彼はただ競技が続けられさえすればいいとは考えておらず、子ども向けの大会開催や一般愛好者同士のクラブ設立といった「自分にしかできない」活動にも積極的に取り組んでいた。そしてこれらの活動は、彼にとって自分を「支えて」と感じられるものであるとともに、所属先の企業にも事業に還元されるものとして認められていた。

この事例は、アスリートのキャリア形成が競技以外から生まれる価値にも根ざせるということを示唆しているように思われる。しかしかにかにしてそうした価値が生まれ、アスリートのキャリア形成を支えることにつながるのかまでは明らかにされていない。そこで本稿では新しいアスリートキャリアの可能性を探るために、特にA氏がいかなる価値に根ざして活動しているのかを掘り下げていく。

3 研究方法

本稿では2023年1月にA氏の居住地かつ活動拠点であるS県T市で実施した調査の結果を用いる。筆者は過去の研究活動を通じて、A氏が競技スポーツの世界における評価によらない「プロアスリート」であることを事前に把握しており、共通の知人を介して研究協力を依頼し、承諾を得た。

調査では、まずA氏に対するインタビューを同日に2回に分けて行った。インタビューはA氏の公式ホームページや彼を取り上げたウェブ記事などから収集した情報にもとづきながら、彼が大学でトライアスロンを始めてから現在に至るまでの生活史をたどり、そのなかで「地域密着型プロアスリート」の活動のありようを問うというかたちで進めた。なお2回のインタビューの合計時間は、およそ3時間45分だった。また1回目のインタビューの前後にA氏のスポンサーである農園と製菓会社、A氏が親善大使を務めるT市の市役所、A氏が所属するT市の商工会を訪れ、A氏も同席のもとで関係者へのインタビューを行った。このインタビューではA氏との関係性、A氏を支援する形式や理由、具体的な活動内容などを聞き取った。インタビューはすべてICレコーダーで録音し、逐語録を作成した。本稿の公開にあたっては、聞き取った内容の使用に問題点がないかをあらためてA氏に確認した。なお匿名性維持のために、A氏や関係者の氏名はもとより地名や団体名なども実名表記はしないことにした。そのほかに、インタビューではA氏や関係者から資料の提供を受けた。

4. A氏のキャリアの概要および現在の活動

大学入学と同時にトライアスロンを始めたA氏は、ランニング・自転車・ランニングの3部構成で競うデュアスロンで頭角を現し、大学4年性のときに日本選手権や23歳以下のアジア選手権で優勝するなどの実績をあげた。そして活躍を評価されたA氏は、機材や遠征費のサポートを受ける「セミプロ」として活動するようになった。

大学院に進学したA氏は「プロ」になることを目指して精力的に活動していたが、「スポンサーに（支援の対価を）返す」には勝ち続けなければならない、かつて「自然体」で行っていた練習は結果を出すために「管理」された「義務的」なものに変わっていった。そのような立場や活動の仕方に「無理」を感じたA氏は競技の第一線から遠ざかり、スポンサー契約はそのまま満了、大学院修了後は「フリーター」になった。A氏はこの当時の心境を「何ができるわけでもないし、何になりたい、何もなれないという間にいた」と振り返っている。ここまで述べてきたことをもとにまとめるならば、A氏は求められる結果を出せなくなったことで競技スポーツの世界からドロップアウトせざるを得なくなり、以後のキャリア形成において大きな問題に直面したといえる。

「フリーター」になって数ヶ月後に、A氏は大学院の指導教員からS県にある通信制高校の教員の職を紹介される。そして「誰も（自分のことを）知らない」場所で「ゼロから始める」という思いで、A氏は教員としてS県に移住することを決める。

ある日の仕事終わりに「(ほかに) やることがない」からとランニングをしたとき、A氏は「セミプロ」転向以前の「本当にやりたいことばかりやっていた」ころの心情が「ふわっと舞い降りてきた」という体験をする。走ることが「めちゃくちゃ楽しい」と感じられたこの体験をきっかけにしてA氏は自転車やランニングを再開し、やがて「趣味」としてトライアスロンやデュアスロンにも復帰する。

S県では地域対抗の駅伝大会が開催されており、A氏は彼の存在を知ったT市の監督から「(T市の代表選手になるために) T市に住んでほしい」と打診を受ける。「アスリートとしてまた求めてもらえることが僕にとってはすごく新鮮」だったというA氏は、続いて以下のように語っている。

それがまた嬉しくて。ああなんか自分の居所を初めて。最初は縁もゆかりもないS県がよかった。それでS県に流れ着いて少しずつやったらスポーツもう1回ちょっとおもしろいなって思い始めている。そしたら今度ここに僕がいる存在意義を少しずつ求めていたなかで、T市で走ってほしいというのはひとつ僕のなかで重要な要素だったというか。だからこそ国体（現在の国民スポーツ大会）にも出たいっていう、そのいる意味っていうのを示したいというのがあって。

T市に転居したA氏は本格的に競技へと復帰し、トライアスロンで国体のS県代表選手になるなどの活躍を続けた。一方で、教職に対して「回ってはいるんだけど歯車は、けどときどき欠けているみたいな」感覚を抱いていたA氏は、生徒に出した「10年後の夢」という課題に自身で取り組んだとき、仕事を「そつなくこなして」いるだけで「俺自身がそんなぶっ飛んだ夢描けてねえじゃん」と自覚する。そしてふと、ある有名ドキュメンタリー番組に出演したいという夢が浮かび、その夢を実現するために「地域密着型プロアスリート」になることを思い立つ。そして「地域密着型プロアスリート」が「これって俺にしかできねえなあ」と確信できる活動だったことから、A氏は教員の職を辞して「プロ」の道へと進む決断をする。転身した当初は貯金を切り崩しながらの活動だったが、現在では多くのスポンサーとサプライヤーから支援を受けており¹⁾、スポンサー料と後述する各種の活動を通じた収入を合わせると、生計を立てるのに「十分」な金額になっているとのことだった。

幅広い意味で「身体を動かすということを商売にしている」A氏の活動は、一概にまとめるのが困難なほど多岐にわたる。そうした活動の一部をまとめたのが表1である。それぞれの項目について順に補足すると、大会出場に関して、現在のA氏はトップカテゴリーで結果を出す

表 1 「地域密着型プロアスリート」の活動内容

大会出場	トレイルラン（一般），マスタース陸上（30歳代後半の県記録更新を目指す）
物販	オリジナルグッズの制作・販売（カレンダー，キーホルダー，Tシャツ，パーカー，など）
イベント	ランニングイベントの監修，サイクリングイベントのゲスト，地域のお祭り（自転車をこいでつくったかき氷の販売）
「委託業務」	過疎地域の新聞配達（ランニング），市のかけっこ教室講師，S県内にある坂道の調査（自転車による地域振興）
SNS	活動の発信（例：登山，300km自走，24時間デュアスロン）

ことはおろか，トライアスロンやデュアスロンにもこだわっていない。そこでは「35歳になったときに，（陸上競技を通じて）もう1回コンマ1秒に対する惜しめない努力をみせていこう」といったように，その時々で自分の関心があることや挑戦したいことが主要なテーマになっている。物販ではA氏が作成したTシャツやカレンダーなどを，彼を応援してくれる人や知人が定期的に購入しているという。イベントでは地域のスポーツイベントでのゲストや地域のお祭りへの出店といった参加だけにとどまらず，近年ではイベントを監修する立場も担うようになっている。「委託業務」とはA氏が請け負うさまざまな業務の総称であり，例えば配り手のいない過疎地域でのランニングによる新聞配達は，彼にとって生計にかかわる仕事，地域貢献，トレーニングを兼ねたものになっている。最後にSNSでは，彼の日常的な活動や，自転車での長距離移動（自走）をしたり1日中デュアスロンをしたりといったイベント的な活動が発信されている。A氏は「可能性は0じゃないから。だから僕はひたすら0.1（さまざまな活動およびその発信）を打ち続けるというか」と述べており，「どこかの0.1が誰かに響いていた」²⁾ことが現在のキャリア形成につながっていると考えている。

5. A氏と応援者・支援者の関係性

ここで浮かび上がってくるのは，なぜA氏に多くの応援や支援が集まり，彼の活動が「プロ」として成立するのかという問いではないだろうか。そしてこの問いに答えるには，競技スポーツの世界で評価される従来のアスリートの枠に収まりきらないA氏と応援者・支援者の関係

性を想定するのが妥当であるように思われる。

まず応援者・支援者側の例として、A氏のスポンサーで農園業を営むM氏の語りから、彼がA氏を支援する理由にあたる箇所をいくつか抜粋してみよう。

（地域の交流会で出会った際に）今度、教員辞めてプロのアスリートになりたいって話で。教員辞めてね、なるなんて。そんな安定したね、収入もあるのに辞めちゃうなんてすごいなって感じて。

Aの熱いところっていうかね。本当に何に関しても真面目だし、何に関しても熱い感じでやってくれるから、その辺にほれたというか。その辺を応援していこうかなっていう、そういう気持ちからっていう感じかな。

別にそれで〇〇（農作物）が売ればいいやっていうのは全くなかったですね。とにかくまあ純粋に応援したいっていう感じで。

まああとAがこのあとどうなっていくかっていうのをみたい。（中略）できるだけ近くでみたいと思いますね。

M氏の語りから読み取れるのは、単純な費用対効果とは異なる支援のありようである。「純粋に応援したい」という思いから資金提供を始め、A氏が「このあとどうなっていくかっていうのをみたい」というM氏は、A氏に競技で結果を出すことや広告価値などは期待していない。つまり拠出した金額に見合った直接的な見返りを前提としないようなスポンサー契約によって、A氏の活動は支えられているのである。

こうした支援のありようは、程度の差こそあれほかのスポンサーにも見出すことができる。A氏のメインスポンサーである製菓会社のK氏によれば、A氏に対する支援は社の「ブランディング」の一環ではあるが、その契約は単なる「（損得の）勘定とかという話じゃなかった」という。実際に契約期間や課せられるノルマ、提供資金の用途などの定めはなく、A氏に与えられている活動の自由度は非常に高い。またK氏は、A氏と社はお互いを「応援したい」関係性にあり、A氏に「応援したい」と「思わされた」とも述べている。裏を返せば、表1に示したA氏の活動は、「純粋」な応援や「勘定」ではない支援を集める価値を有しているということになるだろう。

それでは、A氏が創出している価値の側面に焦点をあてていこう。「地域密着型プロアスリート」として現在に至るまでのあいだに、A氏はアスリートがもつ価値についての重要な気づきを得る体験をしている。そのひとつが、「地域密着型プロアスリート」転向後にデュアスロンの

日本チャンピオンに返り咲いた際の、「結果＝価値」という考え方に関する以下の気づきである。

日本チャンピオン（の賞金）は75,000円なんですよ、手取り67,000円なんですよ。ああ、意味ねえ、価値ねえなって思っちゃうんですよ。

ここの方程式（A氏の提供資料に記された「結果＝価値」のこと）からいえば、ダメだなと思って。それで僕は一気に、ああデュアスロンもう、お疲れでした！っていう。

別にもう、そんなに勝ちたいとも思わないし、勝っている以上もうそれ以上を求められるし継続を求められてしまうので、そうじゃないよっていうのを示すためにも、ポチポチ頑張ってますわぐらいの。

「結果＝価値」という考え方に関して、A氏はアスリートを競技という舞台で「夢」と題された演目を踊る演者に例えている。舞台の下には観覧料を払って観覧席に座るスポンサーがおり、アスリートはそこに向かって「オリンピックに出たい」といった自分の「夢」を応援してほしいと訴えながら踊っている。しかしそこで応援されたとしても、結果の良し悪しにかかわらず、アスリートが踊り終わったところでスポンサーとの関係は終わってしまう。踊り終わったアスリートは舞台から降りるしかなく、観覧席のスポンサーも「いやあ楽しかった、お疲れ！」と帰っていく。同じ演目が繰り返される舞台はだんだんと廃れ、「座れる椅子が少なくなってくると、経済的にも応援する人も少なくなってくると、どんどん舞台もボロボロになっていく」しかない。ここでのA氏の気づきを要約するならば、競技スポーツの世界で評価される「結果＝価値」に根ざしたアスリートのキャリアは、かつての彼自身がそうだったように長続きしにくいのである。

現在のA氏の活動の根幹にあるのは、「存在＝価値」という考え方である。A氏がこのように考えるきっかけになったのは、彼が自身のSNSを通じた広告価値を説明していた際の、あるスポンサーの言葉を受けての気づきだった。

「俺がAを応援したいのは、それで数字が出ているとか、それぐらいの人にみられているとかって、たぶんそんなことじゃねえんだよ。俺はAをみて元気をもらっている。そのもらった元気で俺はこのスーパーを切り盛りして、頑張ろうって思えるから、そこをずっと大事にしてほしい」っていわれて。（中略）そこで気づかされたんです。

そしてA氏は、自分の存在に価値を見出してもらうための働きかけと、それによって起こることを以下のように説明している。

じゃあどうやってやればいいんだっていうときに、あっち側に行かなきゃ。観覧側に行かないと、観覧側で何かアクション起こさないと。自分から舞台降りていかないと。

僕がどんどんどんどん向こうの勉強に行くから、向こうは僕のことを知ろうと思うんですよ。応援する - されるの原理で。そしたら向こうは、A のやっている競技も逆に知りたい、A がやっていることを知りたい、応援したいみたいな。

徐々に共鳴してくれる、存在に価値を感じてくれる人たちがポツポツ現れ始めて、もう僕はプロアスリートになれているというがあるので。

例えばM氏との関係において、A氏は農業やM氏のつくっている農作物について詳細な説明ができるほど勉強し、農作業を定期的にとともにするほか、収穫した農作物の対面販売までで行う。アスリートが自ら舞台を降りて同じ目線で働きかけることによって、働きかけられた相手にA氏のことを「知ろう」「応援したい」という心情が湧いてくる。このようにしてA氏とのあいだに「応援する - される」の関係が築かれているからこそ、M氏は支援を続けているのだと考えられる。

「応援する - される」の関係の別例として、「一事業主」であるA氏が所属するT市商工会青年部のS氏は、商工会が関わる活動のなかでA氏の「うまみを出してもらいたい」と考えている。表1のSNSにある300km自走とは、T市からおよそ300km離れた遠方で開催される商工会関連のイベントにA氏が自転車で開催したことを指している。イベントでのプレゼンテーション準備に助力していたA氏は商工会のメンバーに自走のための旅費を支援されており、またイベントでA氏の自走での参加が紹介されたことは、T市商工会にとっていいアピールになった。ほかにも商工会青年部は市内の催事でA氏に走り方教室の講師を依頼し、依頼を受けたA氏は教室の会場で配るキーホルダーの作成経費を負担してもらっている。また別のイベントでは商工会のブースを使って自転車の動力でつくったかき氷をA氏が販売する機会が設けられ、非常に盛り上がったのだという。このように、お互いができることをして、それによって支え合うような「応援する - される」関係は、A氏と応援者・支援者の双方にとって有益なものになっている。

A氏は舞台を降りての働きかけを別言して、自身の可能性の「枝葉を増やしていく」ことだと表現している。「枝葉を増やしていく」ことには打算も「なくはない」が、A氏の存在に価値を見出してくれる人々との出会いやさまざまな活動の広がりには「マジで偶然」であり、その意味で彼は、「地域密着型プロアスリート」としてのキャリア形成には「ラッキーの重なり」という側面があると捉えている。ただ「何をやるかじゃなくてどこでやるか」とも語っているように、T市がA氏にとって「存在=価値」の方程式を成り立たせられる場所であることは間違い

ない。下記の語りのように、T市がA氏にとって「元気を与え」ようとする自らの「応援」に「応援」で応えてくれる場所であるかぎり、彼の「地域密着型プロアスリート」としてのキャリア形成はこれからも主体的かつ持続的なものであり続けるように思われる。

アスリートってどんどん成績乗ってないと削られる、みたいなイメージですけど。やっぱりこの地（T市）の理由というか、それよりかは僕はまず応援してる人にそれなりに、こう元気を与えたりとか。（中略）「あいつも今週また走ってるのか、俺もやるか」みたいな。そこがでも何よりお金にできない価値というか。

6. 考察

ここまでみてきたA氏のアスリートキャリアについて、本稿では贈与論における「等価なもの交換」と「贈与的ふるまい」というふたつの概念（湯浅，2020）を用いた考察を行う。あらかじめ述べておくと、これらの概念のうち、前者は「結果＝価値」に根ざした「セミプロ」としてのアスリートキャリアに、後者は「存在＝価値」に根ざした「地域密着型プロアスリート」としてのアスリートキャリアに対応している。

「等価なもの交換」とは、同じ値打ち・価値・価格のもの同士が交換されるという、通常私たちが当然とみなしている関係・交流の仕方のことである。この関係・交流の仕方において、例えば労働者は等価性を割り当てられたひとつの〈型〉、換言すれば交換可能な商品ないし労働力として思い描かれる。そしてこのとき、労働者がひとりの人間として備えているはずの固有性や特異性は考慮に入れられなくなっている。もしある労働者が働けなくなれば、経営者はその代わりに同じだけの労働力をもつ別の労働者を雇えばいいのである（湯浅，2020, pp. 13-15）。

「セミプロ」だったころのA氏は、機材の提供や遠征費の補助といった支援を受けることと競技で結果を出すことが等価で引き換えられるかぎりにおいて、アスリートとしてのキャリアを築くことができていた。そしてそれが敵わなくなったところで、スポンサーとの関係は終了した。上の労働者の例と同じく、支援に見合う結果がA氏に伴わなくなれば、スポンサーは彼を求める価値を生み出せる別の誰かと置き換えることができる。あるいはアスリートを支援すること自体に対価が期待できないと考えれば、見返りを得られる別の事業に移ってもいい。このように、「結果＝価値」に根ざしたアスリートキャリアでは、アスリートと応援者・支援者が競技スポーツの世界における評価にもとづいた「等価なもの交換」という関係・交流の仕方で結びついており、そのなかでアスリートは、交換可能な商品ないし労働力に還元されてしまうのである。

他方の「贈与的ふるまい」とは、無償の恩恵を与えたり贈り物をしたりといった「等価なもの交換」の外の領域においてなされる行為のことであり、またそれによって始まる関係・交

流の仕方を意味する概念である（湯浅，2020，pp. 15-16）。人間が自己の貴重な一部を与え贈る贈与的次元を持つふるまいへと促されるのは，他者と切実に向かい合う関係においてである。つまり別の誰かに置き換え不可能な固有の存在として受け入れたその人に対して，人間は何かを与えようとするのである。また「贈与的ふるまい」は純粋な贈与か贈与を模した交換かという二項対立では区切りきれない宙吊り状態に置かれているという点に，もとから見返りを前提にしている「等価なものの交換」との違いがある（湯浅，2020，pp. 32-37）。

「地域密着型プロアスリート」としての A 氏の現在のキャリアは，舞台から降りる働きかけや他者に「元気を与えようとする活動と，それらに対する「応援したい」という応答によって成り立っている。A 氏が「偶然」や「ラッキー」と表現していたこと，あるいは M 氏が A 氏を「純粋に応援したい」と語っていたことからわかるように，この「応援する - される」の関係は，結果的には交換がなされているものの，かならずしも明確な見返りを前提とはしていなかった。また A 氏の「熱いところ」に「ほれた」(M 氏) や A 氏に応援したいと「思わされた」(K 氏) といった言葉から，応援者・支援者は舞台から降りてきた A 氏と切実に向き合い，彼にほかの誰かに置き換えられない固有性を見出しているといえよう。このように，「存在＝価値」に根ざした「地域密着型プロアスリート」のキャリアとは，お互いに支え合う・与え合うような贈与 - 交換という関係性にもとづくことで可能になっていると考えられる。

オリンピックでのメダル獲得に関する報道などをみればわかるように，競技スポーツの世界における高い評価は普遍的・一般的な交換価値を有している。しかし繰り返して強調すると，そうした価値をもたらしことのできる勝者はほんのわずかであり，またそうした価値が伴わなくなったかつての勝者は，別の優れたアスリートに置き換えられてしまう。そうではなく，たとえ誰しもにとって認められるような価値ではなくとも，ある直接的な関係において生まれる別の誰かに置き換え不能な固有の価値に根ざせたならば，そのアスリートのキャリア形成は，競技スポーツの世界における評価の外へと開かれていくのではないだろうか。

7. おわりに

おそらく青年期のアスリートのほとんどは競技に専心することを望んでおり，また結果を出すことを求められている。そのなかで目指される方向性として，競技スポーツの世界における評価を絶対的な軸とするアスリートキャリアから競技スポーツの世界における評価に左右されにくいアスリートキャリアへの移行，という発想にふれることで本稿を終えたい。

図 1³⁾ は「存在＝価値」にもとづく贈与的次元と「結果＝価値」にもとづく交換的次元を尺度として，アスリートのキャリア形成が根ざしている価値を図式化したものである。現実的にはアスリートのキャリア形成は両方の価値が混じり合っていると考えられ，例えば交換的次元のほうに寄っている線分 CD は，競技スポーツの世界における評価にもとづく割合が高

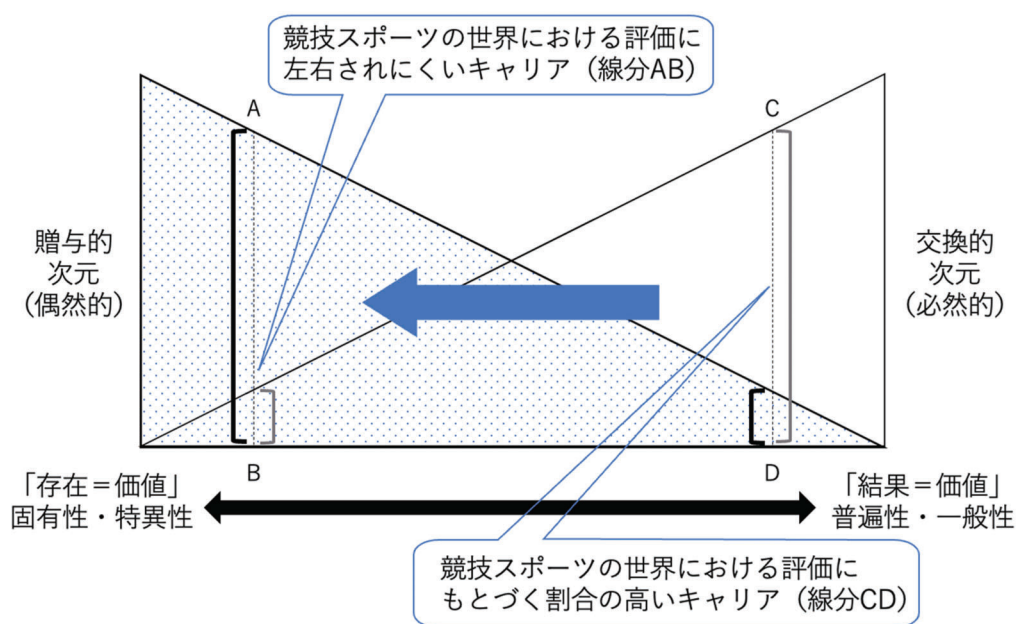


図1 アスリートのキャリア形成におけるふたつの価値

く、その評価の良し悪しによってキャリア形成の成否が決まるという意味で必然性の高いアスリートキャリアを表している。仮に線分CDを今日のスポーツ界における標準的なアスリートキャリアに位置づけるとするならば、左方向の矢印で示したように、この位置を贈与的次元のほうへと寄せていき、「結果＝価値」への偏重を緩和していくことが、これから重要になってくるのではないだろうか。線分ABのアスリートキャリアでは、競技スポーツの世界の外に向いた「枝葉」を介して、アスリートと応援者・支援者が固有の関係を築いている。その「枝葉」が具体的に何であり、またいかなる価値を生み出すのかは、関係する当事者のあいだの偶然性に委ねられる。ただこうした偶然に生まれるかけがえのない価値に支えられることによって、そのアスリートのキャリア形成は競技スポーツの世界における評価に左右されにくくなる。このような移行を起こすには、まずはアスリートを競技するだけの存在に矮小化しないことが肝要になるだろう⁴⁾。A氏は「地域密着型プロアスリート」のようなキャリア形成の仕方について、「ある意味で誰でもどこででもできる」ものだと言っている。アスリートに対する社会の見方が変わり、彼ら／彼女らが自らのもつ可能性に気づくことができれば、主体的かつ持続的なアスリートキャリア形成は、A氏の言葉どおり「誰でもどこででもできる」ものになるはずである。

付記

本研究は JSPS 科研費 JP21K11431 の助成を受けたものである。調査にご協力いただいた方々、貴重なご意見をいただいた先生方に、深く感謝申し上げます。

注

- 1) A 氏のスポンサー額は3段階に分けられているが、そのなかの最も小口のスポンサーを多く集めている点が特徴的である。またサプライヤーには競技で用いる機材だけでなく、日用品の提供や飲食店での無料の食事提供なども含まれている。
- 2) 表1のSNSにある登山について、T市は名山に囲まれた地域であり、A氏が並外れた速さで山頂まで到達していることが、同じT市民である周囲からの「すごい評価」につながっていた。このようにA氏がそのすごさを身近に感じられるアスリートであるということも、後述する「存在＝価値」を成り立たせるうえで重要な点ではないかと考えられる。
- 3) 図1の作成にあたっては、社会学における生成の論理と定着の論理の関係図（作田，1993，p. 31）を参照した。
- 4) 関連する近年の動向として、スポーツ庁が2022年3月に策定した「第3期スポーツ基本計画」では、「現役選手としてのキャリアと引退後のセカンドキャリアという2つのキャリアを含む人生設計全体を、アスリートが主体的に考え、現役時から2つのキャリアを形成する」ことや、スポーツだけにとどまらない「多様な分野におけるアスリートのキャリア創出を促進する」ことへの支援が、施策目標としてうたわれている（スポーツ庁，2022 p. 63）。

文献

- 浜田雄介（2023）「〈第3のアスリート〉のキャリア形成における選択の合理性—あるトライアスロン選手のライフストーリーから—」、『年報体育社会学』，4：35-54.
- 石原豊一（2013），『ベースボール労働移民—メジャーリーグから「野球不毛の地」まで—』，河出書房新社.
- 石原豊一（2014）「書評に答えて」、『スポーツ社会学研究』，22（2）：87-90.
- 石原豊一（2015）『もうひとつのプロ野球—若者を誘引する「プロスポーツ」という装置—』，白水社.
- 水上博司（2009）「1964年東京オリンピック出場アスリートのライフヒストリーからみた就労体験」、『スポーツ社会学研究』，17（2）：49-64.
- 作田啓一（1993）『生成の社会学をめざして—価値観と性格—』，有斐閣．
- スポーツ庁（2022）「第3期スポーツ基本計画」，https://www.mext.go.jp/sports/content/000021299_20220316_3.pdf，（参照日 2024 年 9 月 3 日）.
- 高岡英氣（2018）「プロフェッショナル競技者の概念的考察：経済・技術・倫理の三見地から」、『体育学研究』，63（2）：517-538.
- 吉田毅（2006）「アスリートのキャリア問題」，菊幸一・清水論・仲澤眞・松村和則編，『現代スポーツのパースペクティブ』，大修館書店，210-227.
- 吉田毅（2013）『競技者のキャリア形成史に関する社会学的研究—サッカーエリートの困難と再生のプロセス—』，道和書院.
- 湯浅博雄（2020）『贈与の系譜学』，講談社.

Exploring Potential of a New Career for Athletes: The Case of the “Community-Based Professional Athlete”

Yusuke HAMADA

Abstract

In competitive sports, athletes typically build careers through excellent performance and high evaluations. However, only a small number of athletes achieve such results. This study explores the potential for new athletic careers that do not rely solely on absolute evaluations in competitive sports. Specifically, it examines the career of athlete A, who works as a “community-based professional athlete,” a role that extends beyond earning rewards through competition alone.

Interviews with A and his associates were analyzed using the theory of gift exchange. The findings revealed a mutually supportive relationship characterized by “supporting and being supported” between A and his supporters. Furthermore, the athlete’s irreplaceable value in these relationships was found to stem not from the results of the competition but from his personal presence. This case study indicates that to foster career development for athletes who are not easily evaluated in competitive sports, it is essential to view them as more than mere competitors.

Keywords: athlete, career, “community-based professional athlete”, value, gift